

土佐光信考 中

——土佐派研究の一節——

谷 信 一

三、光弘・廣周

以上の二項目に於て、光信と光弘及び廣周との關係を遺しておいたので、そのことに就て少しく説明しておきたい。即ち光弘との關係は繪所預に就ての問題であり、廣周との關係は所領に就ての問題である。

文明六年十月九日光信は繪所預に補任されたのであるが、それは誰の

註四十四

後繼者としてであつたかといふことを省みなければならぬ。第一に考へられるのは廣周であるけれども、これは前記の如く或は後述のやうに、光信の叔父と目され且又既に薙髮してゐて、別に定職にあるので、その文明元年十月九日直前になほ俗人の占める繪所預ではあり得ないから、推測の候補者としては不適當である。そこで唯一のものは、光信の父に位する直系者であらねばならぬ。光信の父なるものは、光弘であらうと私は推定してゐるが、その假定のもとに、この兩人の關係を考へてみるに、光弘の繪所預補任の年は不明であるが、嘉吉三年六月には既にその職に在り、それから六年目の文安五年八月までは引續いてゐることが知られる。註四十六それが何時辭任したものであるかは、やはり判らないけれども、光

土佐 光信考

信が任せられる文明元年十月の直前には、六角益繼であつたらしい。こ

の益繼は文正元年八月に補せられてゐて、その翌應仁元年、二年と引續

註四十七

いてゐたものと想像せられ、而して四年目の文明元年十月に至つて光信と更代したと考へられる。ところで、繪所預は土佐家の嫡流によつて占

められるのが常例であるのに、この六角繪所がなつたといふことは、一つの異例であり、そこに異例としての何等かの理由が伏在してゐるものと觀察しなければならぬ。元來、六角繪所はかの融通念佛緣起繪卷を應

永廿一年に描いて、同卅一年に歿したる六角寂濟の後裔とみるべきであつて、大和繪派としては名門に屬するけれども、この時代に於て繪所預となるには、土佐家に於ては嗣子相傳すべき格好の人がゐなかつたか、

或はそれと共に、六角家の自薦運動が効いたかであると考へねばならぬ。随つて、土佐家にとつては、この異例を常道に戻すことが必要であ

つて、即ちその時の責任者として光信が繪所預を得ることが喫緊事であるわけで、そこで光信側としても、種々の策動を行つて、文明元年十月に獲得したのではないかと思はれる。必ずしも信憑し難いけれども、かの

『地下家傳』註四十八の光信條に「畫所預有爭論之事」と言つてゐるのは、この

間の消息を暗示してゐるのではないであらうか。而して、それには、叔父の廣周の如きも、一族の浮沈に關することとして、大いに援助してゐるのではないかと思ひ、又後見者としてそれだけの地位と年齢とを既に兼ね具へてゐたのである。

そこで廣周の問題に移ることにする。廣周は、永享十一年十月を初見とし、長享元年九月に至るまで四十九年間の生存期間を數へることが出

註五十

註四十九

来るが、既にこの永享十一年には、彈正忠になつてをり、その職は宮廷繪所預ではなく、寺家か或は幕府の繪所を務めてゐるらしい。其後に現はれる史料の解釋によれば、幕府との關係を肯定せしむることが多いが、それは又當然なことである。即ち兄光弘といふ土佐家の正嫡がある以上は、弟の廣周は職を他に求むるのが普通であつて、宮廷繪所に次いで最高の繪師職は幕府のそれであるか、或は院のそれであるか、寺社のそれであるかであるが、廣周はその中の足利家の給恩を得たものであらう。

註五十一

それを傍證するものは、寛正六年に於ける幕府の用命であり、更に應仁

註五十二

二年三月に於る、丹波國分寺地頭職を返付される御教書である。國分寺地頭職は、幕府から高辻大宮佛所に最初に與へられ、それが更に公方佛師たる五條萬里小路佛所に重ねて與へられたりしてゐるが、この年にそれを廣周が得てゐることが知られる。これは恐らく二重か三重に與へられたもので、高辻或は五條佛所にとつては、一種の押領であり、従つて永正六年十月の訴訟となつて、五條佛所の覺壽と光信（廣周から受繼いだもの）との折半となつて現はれる次第であるが、所領争ひのことは別として、何れにしても、廣周と幕府との關係を認定せしむるに足る根據

となるものである。その後も文明九年四月には同じく領有してゐたことが知られる。廣周は長享元年九月には其他に、近江國栗本郡金勝寺定光坊跡をも領してゐて、これは長祿三年十一月に義政から得たものであつて、幕府繪師の料所たる先例であつたことが知られる。

註五十四

註五十五

註五十六

其他にも泉州神谷なども持つてゐたらしいが、とにかく廣周は右の三領地をもつてゐた。而して彼は延徳四年正月頃まで生存してゐたとの説があるが、それは誤りであり、長享元年後、間もなく、少くとも延徳年

註五十七

間には歿してゐると思はれる。而して、その後も光信が獲得してしまつた。それは所領の項で述べた如くに、光信は延徳三年に金勝寺を、翌明應元年には國分寺をば領有してゐるからである。なほ廣周は長祿三年から應仁二年の間に入道して法名を經増と號したことが以上の史料で判

註五十九

註五十八

る。而して廣周を以て宮廷繪所に仕へたとす説が行はれてゐるが、應永年間或は永享初年に於てはいざ知らず、それ以後はあり得ないことを注意しなければならぬ。

かくて、光信は延徳三年以前に於て、幕府の御用をも専らにすることが出来て、ここに公武の御用繪師として、愈々畫界の覇權を掌握したわけ、そのために、毎年正月に宮中に扇を捧げるのは當然としても、幕府にも期日には畫扇を持參するのが恒例となつてゐるわけであらう。もちろん諸家にも折々に持參することはいふまでもない。

註六十二

註四十五（土佐文書）

（花押）

繪所預事、早任、勅裁旨、右近將監光信領掌不可有相違之狀如件、

文明元年十月九日

註四十五（土佐文書）

繪所預領丹波國大宇社事、早任下知狀之旨、可被沙汰付中務丞光弘之由、所被仰下也

仍執達如件、

嘉吉三年六月九日

細川九郎殿

(押紙) 畠山殿御施行
沙彌

繪所預領丹波國大芋社事、任今月九日御下知狀并同日御施行等之旨、可沙汰付中務丞光弘之狀如件、

嘉吉三年六月十七日

內藤彈正忠殿

註 四十六〔土佐文書〕

繪所中務承知行分、丹波國大芋社領、內宮役夫工米事、可爲京濟之上者、可被停止催促之由候也、仍執達如件、

文安貳

八月四日

國分布施民部大夫

貞基(花押)

開闢飯尾備中守

爲秀(花押)

頭人攝津掃部頭

常承(花押)

守護代

繪所中務丞(知行分)、丹波國大芋(社領)、外宮役夫工米事、可爲京濟之地土者、可被停止國催促之由候也、仍執達如件、

文安五

八月三日

玄良(花押)

爲秀(花押)

常承(花押)

守護代

繪所中務承知行分、丹波國大芋社領、外宮役夫工米事、可爲京濟上者、可被成奉書候、恐々謹言、

月三日

常承(花押)

布施民部大夫殿

註 四十七〔親長卿記〕文正元年八月六日

土佐光信考

略)上 次繪所預事六角繪所治定、可給切符云々、繪所預來六角、遺悠記標山五千足分切符了、

註 四十八 註一參照

註 四十九〔土佐文書〕

二品親王廳下 丹波國三个北庄御庄司等、應早以當庄內伍百足土佐彈正忠廣周給分事、右以彼人可爲給人之狀如件、庄家宜承知敢勿違失、故以下、

永享十一年十月廿五日

公文大法師(花押)

別當 法橋(花押)

註 五十〔土佐文書〕

御料所、近江國金勝寺定光坊跡事、當知行之處、守護押領云々、既被加退治之上者、早如元可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

長享元年九月十六日

(押紙) 清房
前加賀守(花押)
丹後守(花押)

土佐彈正入道殿

註 五十一〔親元日記〕寛正六年六月二日

明日、御一獻爲御進上、御盃臺繪阿事、自先日被仰付、親元調進之、二星堀川百首公實詠(みな月に岩るる水をむすは、此歌心也土佐彈正畫之、下地ハ番匠ニ申付畢、もつとも、幕府關係の用をしてゐるから、直ちにその御用繪師であるとは言ひ切れな

いけれども、大和繪關係のことを特に廣周に命じてゐるところに、微妙さが看取される次第である。

註 五十二〔土佐文書〕

慈照院殿

御判

丹波國、分寺地頭職事、所返付土佐彈正忠入道經増也、早如元可全領知之狀如件、應仁二年三月廿九日

丹波國、分寺地頭職、陣夫以下諸公事等事、被免除畢、可存知之由被仰出候也、依執達如件、

貳

月八日

(飯尾) 爲信(花押)
(布施) 貞基(花押)

土佐彈正入道殿

註 五十三 所領の項の本文に引用せる文書參照。

註 五十四〔土佐文書〕

土左彈正入道知行分、丹波國桑田郡國分寺地頭職、御所御修理料段錢事爲免除之地上者、早可被止催促之由候也、仍執達如件、

文明九

四月二日

數秀(飯尾) 英基(布施) 爲信(飯尾) 爲信(花押)

守護代

註 五十五 註五十參照。

註 五十六〔古畫備考〕土佐廣周

○丹州大芋庄、泉州神谷、江州金勝寺定光坊跡者、爲繪所料也、

義政公御袖判

御花押

近江國金勝寺定光坊跡事、爲料所預土佐彈正忠廣周者也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

長祿三年十一月九日

註 五十七〔親長卿記〕延德四年正月廿一日、今日、以勾當内侍仰云、繪所土佐彈正、

去々年申一級、去年又申間、被仰早速之由之處、當年又望申、彼等事、一向沙汰外歟如何、予申云、餘早速歟、羽林府役、四ヶ年、或六ヶ年之間、於彼等、餘不可然之由申了、

『扶桑名畫傳』はこの記事を廣周の項に掲げてゐるのは、「土佐彈正」といふ語に基づくためであらう。しかし、光信が彈正になつた實證はないけれども、むしろ光信のことに解釋した方が妥當で、その方が官職を競望する本文内容とも合致してゐる。

註 五十八 註卅、卅一參照

註 五十九 註卅二參照

註 六十〔御湯殿上日記〕明應三年正月十一日、(繪)將監(年々)の御あふき(扇)まいらする。

明應四年正月六日、略(上) 茲所より御あふき(扇)まいる。

將監とあるも、茲所とあれば、光信のことであらうと思ふ。かかる官位の誤りは屢々あるものである。

〔土佐文書〕

(繪所) 茲ところより、かれ井の御あふき參候、めてたくおほしめし候よし心へて申候可候、めてたくかしく、

〔甘露寺〕
かんろし中納言とのへ

これは正月のものかどうかは判らないが、嘉例のものであるから、慣習的な進上扇である。ただ光信が光茂かも知らないけれども、参考として掲げる。

註 六十一『殿中申次記』に見ゆる幕府への月扇進上に就ては註六を參照。

〔室町年中恒例記〕

十四日

一、繪所一重 土佐一重 檢校一重

四日

一、御扇二本藝阿進上之(中)次藝阿進上の御扇申次御目にかけ、則藝阿懸御目也(下)

十日

一、御扇一本狩野進上之、御太刀取下之、御參内ニ御用之也、

右は藝阿彌や狩野家が足利幕府に毎年正月の中に扇を進上する慣例を傳へてゐるもので、永正年間『殿中申次記』の前時代の慣例である。時代は「藝阿」とあれば、その推定が可能である。ところで、ここに「繪所一重、土佐一重」とあつて、繪所と土佐とを區別してゐるからして、前者の繪所は宮廷繪所即ち光信、後者の土佐は土佐廣周で幕府御用繪師を意味してゐるのであらう。それが、『殿中申次記』の永正年間に入ると、廣周に代つて光信自身が幕府の繪師となつてゐるのであるから、明白に「土佐刑部少輔」と記載されて疑問がなくなるわけで、ここにも私が廣周を以て幕府の御用繪師とし、その歿後は光信が兼職したとみる根拠が實證されるであらう。

註 六十二〔宣胤卿記〕永正十四年二月十六日、晴、光信朝臣扇一本持來、遺細、自大覺寺殿梅漬一器給之(下)

四、作品

右の如くに、光信は五十年に亙つて繪所預を占め、その間、高位高官に陞つて、而かも長命を得たのであるからして、その一代の畫作の數量は實に莫大なものであつたと想像されるが、しかし正確な史料に映ずる範圍では至つて僅小であつて、次の廿二點を數ふるにすぎない。

便宜上、製作した年月順に列舉してゆく。文明十九年正月には星光寺緣起繪卷(後述)を描き、長享二年十二月には盃臺に歌繪を裝飾してゐる(註六十三)

ることを三條西實隆が著録してゐる。この記事は、既に述べてきたる廣周と光信との關係を、更に具體的に暗示する内容のものであるので、ここに少しく解説を加へて、私説を有力化せしめたいと思ふ。その文意は、来る十二月十九日に、御臺即ち足利義政夫人日野富子が、義尙出征中の近江の陣營に赴くので、盃臺の繪を繪師に申付けたところ、その繪師は上意の如くには描き難いと拜辭し、所詮は土佐光信に沙汰すべき性質のものである云々といふのである。これは明らかに將軍家の御用であるから、公方繪師に命ずるのが順序であつて、その時の幕府御用繪師と考へられるものは、大和繪では土佐廣周、唐繪では狩野正信の二人である。ところが、この盃臺の繪は「足引のこなたかなに道はあれと」云々の歌意を筆手繪に描くのであるから、大和繪畫家の領域であること勿論であるからして、大和繪畫家たる廣周に命ぜられねばならぬ。事實、廣周は、これより先、寛正六年六月にも、能阿の意匠に基づいて盃臺の繪を調進してゐる前例がある。しかるに、その用命を受けた繪師が廣周であるならば、それを描き能はぬといふことはあり得ないことであるからして、この時の繪師は唐繪の正信か未熟者かである。未熟者の存在は考へられないからして、この繪師その人は正信と心得てよい。而して正信なれば、それを辭退するのが自然であつて、そこで光信に廻つてきたものであらう。問題の中心は何故に先例の如くに廣周が登用されなかつたかといふことにあるわけで、その根據として、廣周はこの時には既に病體であるか或は鬼籍にあるかの何れかであるといふことを想定しても差支へないであらうと思ふ。以上の推理は至つて單純であるけれども、この場合にはかかる形式的論理が成立し得る條件を具へてゐる。とにかく、かうし

て光信と幕府との關係をこれによつて肯定しなければならぬが、やがて間もなく光信は廣周の將軍家からの領有地を相續するのであるからしてそれとこの場合とは廣周の歿、光信の繼承といふ事實の前後關係をなす一連の出來事であると解釋し得るのである。さてそれは別として、光信は實隆の意匠によつて、この難解な裝飾をなし遂げたものであらう。

更にこの長享二年の四、五月頃の製作と考へられるものに、嘉樂門院註六十五花園後宮の御影がある。嘉樂門院は後花園天皇の皇后で、後土御門天皇の御母で在らせられ、同年四月に崩せられてゐるので、直ちに光信が御影製作に携さはつて、五月廿七日以前に成就して、後土御門天皇御建立の伏見の般舟三昧院に安置されてゐる。註六十六而してこれから八年後の明應五年五月に狩野正信が足利義政夫人日野富子像の製作に際して、般舟三昧院に參じて女院御影の寫しを取つて參考としてゐるのである。

翌延徳元年九月には後述の十王圖を描き、併せて同年の中に後土御門天皇の御尊體だけを謹寫してゐる。天皇は御寶算四十八齡に當つて、鏡に向つて親しく御龍顏を寫され給ひ、御體部のみを光信が加筆した。註六十七この製作方法は、本願寺所藏の親鸞上人の立像と同様であつて、いはゆる鏡の御影と稱される種類のものである。御影上に讃する御製和歌に就ては、實隆が與つてゐるが、御製は次の如くに拜される。

わかよはひ彌陀のちかひのその數に

あへるを時とうつすおも影

この御壽像註六十九供養の曼荼羅供が同年十二月廿三日に般舟三昧院に於て行はれてゐる。越えて同月廿六日には、實隆が更にその裏書註七十の銘を記して、天皇御草創の三昧院に納められた。前述の如くこの院には同じく光信筆

の嘉樂門院御影が前年に安置されてゐて、御母子二代の御像二本が相ついで同一場所に納められたことになり、以て光信の光榮を偲ぶに足るものである。なほこの御壽像に就ては、次の如き因縁が遺つてゐる。天皇は明應九年九月廿八日に崩御遊ばされ、その御聖忌は毎年この御影を掲げて營まれたであらうが、特に永正十三年九月廿一日から同廿八日まで執行はれた御十七回忌御法事に際しては、實隆は御影上の御製卅一字を題字として和歌卅一首を詠じてゐる。それにつけても、この御影今は如何であらうか。

翌々延徳三年三月には信實本によつて人丸像^{註七十一}を寫して、實隆が供養歌を講じてゐる。翌明應元年夏には後圓融院御影^{註七十三}後述を拜寫し、同四年六月には普賢菩薩像^{註七十四}を宮中に畫進してゐる。なほこの年以前に幕府の佛事用の旗を描いてゐるが、その製作が遅延して督促されてゐる。而してこのことは、光信が公方繪師の職を兼ねてゐるので、その用命の中の一つであらう。

文龜年間に入ると、まづ元年八月には、實隆は、色紙形の彩色塗直し^{註七十六}の雜用を繪所に命じてゐるが、この場合の繪所は代表者としては光信を指すにしても、仕事自身はその弟子のするべき性質のものである。しかし實隆が和歌を書いたこの板繪卅六歌仙圖^{註七十七}そのものは、或は光信の作であるかも知れない。同年十月には、實隆の肖像紙形を取つてゐるが、よく似ないので、像主の不興を蒙つてゐる。當時に於ては、かかる例が屢々あつて、狩野正信の如きも何度も寫し直しをやらされてゐるが、光信にしては然りであつて、當時の畫界の事情を察するに足る事柄である。^{註七十八}本像が完成したことに就ては、其後の實隆公記に何等現はれてゐな

いので終に未完に終つたのかも知れない。實隆像として最も古く確實なものとしては、二尊院本を挙げねばならないが、それとこの光信の製作中のものとの關係、或は廣く實隆像と光信との關係は、條件上では當然關聯があり得る蓋然性があるが、今は何とも言ふべき直接史料がない。翌二年三月には座主の宮のために佛畫を描いてゐる。^{註七十九}なほこの文龜元年から北野天神緣起繪卷^{後述}調進の議が起つて、同三年に三卷本を完成してゐる。

永正年間になると、實隆の命で同元年五月に十三佛圖^{註八十}を、同三年四月には春日本地五尊像^{註八十一}を描いて、共に美麗殊勝なものと賞讃されてゐる。同年九月には近衛尙通のための仕事をしてゐるらしい。同じくこの年十二月の出來事として特記すべきは、朝倉貞景のために「京中」を描いた屏風一雙^{註八十三}を新調してゐることである。「京中」とは洛中の意であるからして、題材上では、近世初期以來流行したる洛中洛外圖屏風の洛中圖に該當するものである。この光信の洛中圖一雙は、洛外が伴つてゐるのかどうか判らない。實隆は「大いに珍重のもので、一見興あり」と言つてゐるが、かかる修飾的な印象語によつては何事も言へないけれども、この畫題なり形式なりがなほ當時に於て通行のものではなさうに受取られる。これは光信の創造ではなかつたかも知れないが、洛中洛外圖屏風の古例として注意すべきことである。近代に至つて光信筆となす「洛中洛外圖屏風六枚」の摸本があつたことは、以てその史實と照應せしむべきことであらう。而して越前の朝倉家といふ武家のために描いたところに、光信と武家との關係も公家と竝んで密接であるらしいことが判り、或は又、名所繪乃至は地圖的な效用をもつ洛中圖の流行原因の所在の一

半も首肯せられる。同六年三月には阿彌陀三尊像を同九年五月には勸修寺縁起繪卷を描いてゐる。その原本の所在は知られてゐないが、帝室博物館所蔵の山ト良次筆の同名繪卷との關係はどうであらうか。

永正十四年十一月には、中殿御會圖屏風を鑑定して先祖行信筆と極めてゐて、土佐派始原に就ての重要な示唆をなしてゐるが、なほこの年九月には、光信一代の傑作たる清水寺縁起繪卷^{註八十六}後を完成してゐる。同十六年五月には半身阿彌陀像と不動尊像とを描いてゐる。本像は、恵心僧都筆と傳へて天王寺西門の脇壁の壁畫を三條西實隆が模寫し所藏してゐたのを、中御門宣胤が借用して再び光信に模寫せしめた。而して半身阿彌陀像と言ひ恵心僧都筆といふところからみると、どうも阿彌陀の山越圖のやうに解されるが、宣胤は本圖を表にして、裏には弘法大師筆の不動明王像を描かしめて、以て自らの臨終用の衝立障子に裝備してゐる。

この製作過程に就ては、數通の文書が残つてゐて、その順序が判り、且又費用や日數のことにも觸れてをり、公家と淨土教との問題など甚だ興味があるが、すべては註に譲る。

この永正十六年は、光信が歿したと考へられる同十八年の二年前であるが、その前年の十七年には、嚴島神社客人社の繪馬額面卅六歌仙圖^{註八十七}後を描き、實隆が和歌を書いてゐる。これが事實であるならば、これを最後として、その長い一生に於る畫作の事歴を正史の上から歿する次第である。

次に蛇足ではあるけれども、江戸時代末期前後に於る鑑識に基づいてはゆる傳光信筆なる作品に就て附言しておく。それらが現存すると否とは暫らく別とするも、その數量は二三の畫傳書によつて計算しても、約

四十五點に上り、更に狩野家や土佐家に傳來したる摸本や縮圖の中から傳光信作品を拾ふならば、百點に餘るであらう。しかしその大部分は光信筆を否定しなければならぬだらうけれども、かかる傳稱作品の多いといふこと、特に例へば星光寺縁起繪卷にも光起が光信筆なる奥書の極めを書いてゐるが如くに、室町時代の繪卷や大和繪様式のを鑑定するには、一應は光信に擬定するのを以て自然となつたが如きは、實に光信が土佐家中興の祖としての實質と、その世間的著名さとを具へてゐたからに他ならないからである。

註六十三「實隆公記」長享二年十二月十五日、來十九日御臺御方渡御江州御陣、御臺被仰付之處、畫師申趣不叶上意、所詮土佐將監令同道於予所、可然之様申談、可沙汰進上之由仰也云々、件下繪披見之處、足引のこなたかなたに道はあれと、此歌心也、山ヲ重々ニ書て道ヲ方々へつて車輪一有之^{件輪之下被入筆}、蓋交物二居之、蓋の中ニ都へいさ如此二之蓋ニ分テ書之、此段餘顯著不叶上意云々、此儀勿論也、所詮愚存之分者いさ如此文字ヲ掘透テ二ノ蓋ヲ被居者可然歟、此三字ニテ至極此歌露顯、又臺ノ見様も可然歟之由命之、海阿承諾、則件文字予可染筆之由之間、雖斟酌書之遣了、將又土佐將監以折帛、同御臺臺事有相談子細、此繪様尋常見及物也、交野眞柴折敷て此歌心也、狩衣姿可然歟之由、但可相計之由報了、

右の文中で「畫師申」の畫師を以て、次の「土佐將監令同道於予所」云々の土佐將監にかかるものと解釋するといふと、本文中での私説が異つたものになる。而してその場合には直接に幕府から光信に用命があつたが、光信は意匠の困難のために實際の指示を得るといふことに解釋される。しかし何れにしても、將軍家の仕事に關係をもつことは動かせないので、以て光信と幕府との畫事に關する交渉の最初のものとしなければならぬ。

なほ正信と幕府との關係は、正信に就て何れかの機會に論ずる折に詳述するとしても、既にこの頃に關係をもつてゐるものとして差支ない。

註六十四 註五十一參照。

註六十五「實隆公記」明應五年五月廿二日、御臺御宵像被寫之、御衣裳、几帳以下事、可爲如何哉之由、萬松軒以消息、自廣福院被尋之、嘉樂門院御影、先年故禪閣被計申之、件時、繪所土佐刑部少輔圖繪之、可覺悟歟、先被尋仰、用拾之間、重而可申之由

報了、

同廿六日、彼御影事、猶以自萬松軒重々有示承之旨、繪師狩野入道來、則相調。愚存分大概雖申合、猶不得其意之間、所詮伏見御安置之女院御影拜見可然之由命之、然者明日邊可參城南之由申之間、則書折帛可遣般舟院主之由命之了、

同廿八日、及晚狩野入道來、昨日參伏見御影拜見寫取之、御裝束色目等事、几帳等之事、巨細事示仰之、勸一盡了、何様彼肖像令出現者、先可持來之由談之、件色目等委可注之、

日野富子は明應五年五月廿日に歿してゐるので、その翌々日に肖像製作となつたわけである。而してこの場合に、正信が命を受けるといふのは、公方繪師を尊職とするからである。

註六十六〔後法興院記〕長享二年五月廿七日、參般舟三昧院、於嘉樂門院御影前令燒香、この嘉樂門院御影は即ち光信本であると考へられる。

註六十七〔洛陽般舟三昧院記〕伏見般舟三昧院は、後土御門院御草創なり○中其ころ北嵯峨二尊院に住せる善空上人諡號圓慈和尙四衆兼才をたふとびおぼしめして、菩薩大戒をう

けましゝて、淨土安心などきこしめして、ひとへに安養得生に歸し給へり、經思歡喜嘆未曾有廓然大悟得無忍とも申べきにや、されば六八の誓願も御心に感じおぼしめしけるにや、御齡四十八の年、鬱鏡にむかはせ給ひて、御手づから龍顏を模寫せられ、畫所預光信に仰られて尊形をうつさしめ、御製の和歌一篇を題せられ、この院にのこされけり、天照太神の神鏡をとめをき給へるにひとしく、今より又、百王の供基をはじめたまへるとぞおぼゆる○中これさきだちて仙宮を經營し、佛閣を建立の 願にて、征夷大將軍にみことのりして、造立不日落成せり、則般舟三昧院の勅額をか

けらる、それより以來、遺勅ありて、代々御追善御追福、此所にて修せらるる事恒例なり、毎事、禁中に模せらるる故、法會は皆准御齋會なり、されば衣冠たゞしからざる者は出入なし、當時にきては、勅願隨上の精舍とも申べきにや、凡小僧が見聞の及所、聊記する而已、

「凡小僧」とは三條西公條であらう。

註六十八〔實隆公記〕延徳元年十二月十四日、抑御壽像上讃御製御談合、聊述愚存用入了、賦之様、可書進上之由、被仰間染筆了、

（和歌略ス）

凡如此也、

註六十九〔御湯殿上日記〕延徳元年十二月廿三日、御しゆそのくやうに、ふしみの御寺にて、まんだらくあり、ちやくさに源中納言、みんな部卿まいる、千しゆ萬せる、御つゝ、かなくて御めてたしめてたし、

〔實隆公記〕延徳元年十二月廿三日、今日於城南般舟院有曼荼羅供、善空上人爲導師僧侶八口云々、是御壽像供養云々、源中納言、民部卿等著座、依黑衣之衆法事頗嚴儀歟如何、

註七十〔實隆公記〕延徳元年十二月廿六日、今朝御壽像裏書事、依仰書之了、註七十一〔雪玉集〕彼御寺にありしうち、時々おもひつゝ、れし事ともを、御影のうへの御製の冊一字をかしらにそへて、かきつゝ、れてなむ侍し○下

〔池藻府〕八月には先帝の十餘り七廻りの御佛事、般舟院にて行はせ給ふ、公卿殿上人つとひ参れり、親王達も渡らせ給へり○中三條の入道大臣も詣給ひ、事ともとりもちて仕ふまつり給ひける、此御寺は先帝の御影のありけるか、其上に御製あり、その御ことの葉に、

わかよはひみたの誓ひの其數に、あへるを時とうつす倂此文字をかしらに置いて、入道三十一首歌つかふまつり給ふ、其はしめに○中次々は長き事にてと、め侍る、上は内にて此御法事の有さま、はるかに思ひやらせ給ひつゝ、いと物哀に詠めさせ給へり○下

なほ右二記録本文首尾の委細は、『大日本史料』九篇之五參照。

註七十二〔實隆公記〕延徳三年三月廿四日、早朝向宗祇庵、是兼日招引也、人丸像新圖土佐利部少輔光信書之、本信實真跡也、供養卅首歌講之、

同年四月廿三日、宗祇法師人丸影持來之、來月上旬可下向越州、其間預置之由也、ついでに、この光信本とは直接關係はないけれども、人丸影の事を併記しておく。同年五月六日、家傳人丸影一幅相傳之、同年十月十一日、兼載法橋來、勸一盡、雜談、人丸像持來令見、讚爲重卿歟、殊勝々々、於畫者信實朝臣眞跡歟、頗所望之物也、沾却物云々、

註七十三〔御湯殿上日記〕明應四年六月八日、ふけんゑんめいの御ゑ、しやうけんにしんつうつさせらるゝ、いてきてけふまいる、二宮の御かたより御きたう御申ありて、御なて物まいる、

同月十四日、ふけんゑんめいのさうか、せられて、かち井とのへ御くやうの事、昨日よりまいらせられて、けふ返まいる、めてたし、御ふせに御かたひら御ふく二そひてまいらせらるゝ、

註七十四〔土佐文書〕

明日例日まて候間、今日中に持參候はてはかなうましく候、日暮候て不可然候、御旗、今日御加持可申候、聖護院殿申候間、遅々暮候へく候、にては不可然候、不可有御等閑候へ共、只今の程に、早々可被調進候由候、返々、片時も早々

御調進可然、恐々謹言、

八月廿五日

貞通(諏訪)
通(花押)

土佐 刑部少輔殿

右は年期不明であるが、宛名に「土佐刑部少輔」とあるから、光信が刑部大輔に任ぜられた明應五年十二月以前のものであると解釋して、暫らくこの明應五年までの事歴の中に掲げる。

註七十五 幕府から御用があつたからとて、直ちに御用繪師とみなすことは勿論出来ないことは云ふまでもないが、光信の場合はその傍證が堆積することによつて、その根據が有力となり、況んや、その給恩の所領をもつことによつて、それは決定的なものであらう。

註七十六〔實隆公記〕文龜元年八月廿日、伯二位入來、廣田社内一社歌仙冊六、就伊丹某所願令所圖、其色紙形可染墨筆之由、願主所望也、仍携來之由被命、板五枚圖冊六人、惡筆雖有憚、不可有子細之由領狀了、

同月廿一日、昨日之色紙形書之、一首書違之間、仰畫所色紙令彩色改、

同月廿二日、歌仙色紙今朝遣之、

同月廿四日、先日歌仙色紙禮送一荷兩種、仍招伯二位勸一盡之處、傳奏同入來、

註七十七〔實隆公記〕文龜元年十月四日、土佐刑部少輔來中略、又愚拙肖像帶形令寫之、十分不似、比興也、

註七十八〔國華〕第五五八及び五五九號、拙稿「室町時代に於る肖像畫の製作過程」參照、

註七十九〔宣胤卿記〕文龜二年三月五日、勸修寺黃門狀來、座主宮被申三境御本章事、被仰付給所、可被渡儀式事、號三境子事等尋之、

これは光信と解してよからう。

註八十〔實隆公記〕永正元年三月廿三日、十三佛新圖事、申付土佐刑部大輔了、代物少分今日遣之、

同年五月十五日、十三佛新圖像出現、土佐刑部大輔令持送之、美麗殊勝自愛此事也、是爲來十月之追善也、

なほ同年四月廿一日に「十三佛像借請之間、同遣之」とあるのは、この新圖の手本となすために舊本を遣はしたのであらうか、或は全く無關係であるのかも知れないが、參考のために掲げる。

註八十一〔實隆公記〕永正三年四月晦日、春日本地五尊一幅、繪所畫之、今日令持遣、殊勝出現自愛々々、

土佐 光信 考

同年六月九日、五尊新圖開眼供養七ケ日行、合堂數尊海僧正被送之、自愛祝着、

註八十二〔後法成寺尙通公記〕永正三年九月廿二日、龍卅枚必付申繪所三十疋半也、この繪所も光信と解してよいであらう。

註八十三〔實隆公記〕永正三年十二月廿二日、越前朝倉、屏風新調一雙、畫京中、土佐刑部大輔新圖、大珍重之物也、一見有興、

註八十四〔實隆公記〕永正六年三月三日、

註八十五〔元長卿記〕永正九年五月四日、勸修寺緣起之繪出來、光信持參祝着、

勸修寺緣起繪卷は、この甘露寺元長が勸進の一人であらうか。その詞は「群書類從」卷四百卅に收められてゐて、永正三年正月十四日、正三位行權中納言藤原朝臣宣秀なる奥書がある。光信本がこれに據つたのかどうか知らないが、若しそうであるならば、その詞筆者の中に中御門宣秀を加へることも無理ではないであらう。而して詞は割合に短いからして、長大な巻數でなかつたものと考へられる。

なほ「古畫備考」には本繪卷を以て永正十四年出來と記してゐるが、別本ならいざ知らず、一本は確かにこの永正九年の作であることは明らかであつて、或は清水寺緣起繪卷と混同して重記したのではなからうか。

註八十六〔宣胤卿記〕永正十四年十一月廿七日條、その全文は本誌中八十七號の拙稿「藤原行光考」に引用したから省略する。

註八十七〔宣胤卿記〕永正十六年、五月九日、陰、入道前内府所持之半身阿彌陀畫像借之、書寫事、仰遣光信朝臣、此本は天王寺西門腋壁惠心僧都圖像寫之云々、

同月十九日、晴、召寄番匠、令作本章臺、衛立障子也、

同月廿一日、陰或晴、宣増來、仁王經讀誦大講堂方、又於余方阿闍佛供養、又阿彌陀下繪張付衛立障子遣光信朝臣、

同月廿八日、陰半夏生、衛立障子之阿彌陀來、光信朝臣書之、今日五十疋先日三十疋遣之臨終之時可立枕析也、裏ハ令書不動明王、爲令降伏臨終之魔障也、

六月六日、晴晚陰、宣増來、阿彌陀、不動等供養、遣布施ニケ、光信朝臣打輪一持來、

なほ「宣胤卿記」の五月末には次の實隆一通、光信四通の中御門家宛の書狀を收めてゐる。

次の一通は宣胤から實隆への阿彌陀像借用申入の承諾書であつて、實隆と像との由來を語つてゐるが、品物は同日に借出してゐる。

高問恐悅候、彼一首」早速被遊候、誠本望、此御詠尤殊勝無申許候、抑半身阿彌陀雖何時」可進候、納物も此方には」人を給候て可進候、これは「天王寺西門脇壁惠心」僧都圖像にて候を寫申候、此眉間珠は法隆寺井」底に太子勝覺經御講」讀

之時、毎日御行水之時、爲淨於其水、所被納候珠候、此尊模寫之時、不慮、有靈瑞感得奉入此、白毫之由申候、隨分秘藏之、尊容候、被寫候者、尤可然事候、旁近日以而可申述候、恐々謹言、

永正十六

五月九日
荒 空

五月九日に原本を實隆から借り、同日に光信のもとへ轉送された。それを基にして、愈々その下繪が出来たので、光信は次の書狀と共に宜胤の所へ内見に呈出したものらしい。

けさ御ほんぞん「まるらせ候、まふん」きよ水へ參詣「申候て、くはしくは申」あげず候、たゝいま「まかりかへり候、ます一さおり」下され候、かたし「けなくしやうくわん」いたしまるらせ候、御心へ候て可申「あづかりまるらせ候、かたしこを」いたし申あげまるらせ候、御びやうぶはり「つけられ候て、やがて下され候て、そと」したゝめ、しん上申まるらせ候かしこ

申給 きやう部大輔

右の下繪を宜胤が一見して、十九日から作つてあつた臺の衝立障子に張付けたのが廿一日であつて、同日にそれを再び光信のもとへ送つてゐる。その時に圖様に就ての注問や金卅疋を共に送つたらしいことが次の受取の書狀で判る。従つて、この書狀は日附を缺くが廿一日直後のものである。

御本章の御「障子被下候、心へて」存候、山下へ「紙をのへられ候」可然存候、山に「木をとろく」書可申存候、又御うち「不動」坐像候心へ存候、石座「な」とにて「可然存候、將又」御要脚三十疋「被下候、是迄も」入候ぬ事を「迷惑仕候免」角申候へは緩意「存候旨被下候、懃而調可申」間、預御心之以上「かしこ」

申給 形部大輔

廿一日に下繪を下げ渡され、次いでそれに加筆し、併せて裏の不動尊像も描いて、廿八日に次の書狀と共に現品を宜胤方へ届けた。

御本章入申候、不動尊は弘法「御筆寫申候、先仰分調」申候、依御意「加筆可申候、」安子細候、此分「御心へ候て可預御」申候、恐々謹言、

五月廿八日

刑部大輔

光信(花押)

御奏者 御中

廿八日に衝立障子が届けられると、直ちに宜胤は光信へ満足の意と金五十疋とを申遣はしたやうで、次の翌廿九日附光信書狀はその返報である。

昨日御本章「無子細之由仰候、」祝着仕候處、又五十疋被下候、已前之至極存候、

安御用之事候、「如此之儀、迷惑」仕候間、返進申候、「此旨御心へ」候て可預御披露候、「加様候へは一向」迷惑仕候間、能々「御心へ□申□」存候、旁參候て「可□申候、恐々」謹言、

已 剋

刑部大輔

光信判

川 中 殿
御 返 報

なほ次の一通は右と殆んど同文であるが、光信が五十疋を返したので、更に下渡されたに就ての返書であらうか。

先刻被申候、「安問事候已」前被下置候さへ至極「存候、又五十疋」迷惑仕候、安奉公「事候、如此御懇」之儀無曲存候、「乍去御芳志之」事候間、畏存候、旁以參拜可乞「申候、可預御披露候、」恐々謹言、

五月廿九日

刑部大輔

光信(花押)

川 中 殿
かくて、二像の製作日数が見當がつくし、その費用の一部も知られるが、それよりも光信の書狀によるその文章を五點も見るといふことは、用件のみではあるが、その性格の一端に觸れ得るやうな氣がする。

註八十八

- 扇流屏風(倭)
- 屋嶋合戰屏風(倭)
- 蘆屋釜下繪(倭、古畫)
- 源氏五十四帖表紙繪(倭)
- 竹生島祭圖(倭)
- 人 丸 像(倭)
- 三十六歌仙頌(倭、古畫)
- 細川澄元像(畫圖)
- 石山寺繪卷第四卷(好古)
- 一谷合戰繪卷(類聚)
- 灌頂繪卷(畫圖)
- 孤物語繪卷(倭、類聚)
- 東寺弘法大師繪卷(好古)
- 源氏物語屏風(倭)
- 五節舞屏風(土系)
- 豎田の間の繪(倭、土系)
- 義經記扇面繪(畫圖)
- 羅漢圖(倭)
- 平家盛衰圖(古畫)
- 地藏院騎馬武者像(類聚)
- 桃井直詮像(同系圖)
- 因幡堂繪卷(好古)
- 金山天王寺繪卷(倭)
- 譽田八幡社繪卷(奥極)
- 狂僧雙紙(好古)
- 山門僧傳繪卷(畫圖)

下萌雙紙(古畫、類聚)

十念寺繪卷(模)

四十八番春畫(倭)

七十一番歌合(模)

依藤太繪卷(畫圖)

鶴雙紙(倭)

百鬼夜行繪卷(古畫)

毘沙門堂繪卷(類聚)

舞樂圖卷(倭)

當麻法然繪卷(畫圖)

十二類繪卷(倭)

聖德太子繪卷(展閱)

職人盡歌合(倭、畫圖)

多武峯繪卷(畫圖)

地藏堂雙紙(倭)

鼠雙紙(倭)

百人一首繪卷(圖畫)

福富雙紙(古畫、類聚)

藤袋雙紙(倭)

〔倭〕倭錦、畫圖 畫圖品目、古畫 古畫目錄、類聚 古畫類聚目錄、模 模
本、土系 土佐系圖、好古 好古小錄、奧極 紙中極め奧書、展閱 寺社寶物
展閱目錄〕